

## 「非認知的能力」から読み解く博物館での学び

八木 剛（自然・環境再生研究部 主任研究員）

みなさんは、何をしに博物館へ行きますか？勉強ですか、遊びですか？

博物館は、実物資料とそれに精通する専門家、付帯する施設を通して、人々に学びの機会を提供する教育機関です。専門的な知識の提供は博物館の得意とするところで、社会からもその役割を期待されています。しかし、多くの利用者が博物館に求めている、あるいは博物館から提供される学びは、必ずしも知識だけではありません。これは、多種多様な利用者と日々向き合っている博物館人の多くが実感していることですが、学びの中身が何なのかについては、あまり深く議論されていませんでした。

ひとはく（人と自然の博物館）が開館した 1992 年から四半世紀を経て、学びを取り巻く社会情勢はずいぶん変化しました。IT の発達によって専門的な知識もインターネットを通して今や簡単に入手できます。AI の実用化でさらに状況は変わっていくのでしょうか。そんな新しい時代を前に今、「非認知的能力」という概念が注目されています。

博物館が利用者に提供する学びのうち、知識ではないもやもやとしたものは何かという疑問は、それを非認知的能力に関するものと考ええると、すっきり氷解します。もやもやしたものをうまく説明できるということは、博物館の利用者にとっても、サービスの提供者にとっても、喜ばしいことではないでしょうか。自分の経験も交えて、これについてもう少し考察してみたいと思います。

### 「非認知的能力」の再認識

国立教育政策研究所は、2017 年 3 月に「非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書」を上程しました<sup>1)</sup>。国際的な潮流となりつつある非認知的能力の育成を、わが国でも今後の教育目標（とくに学校教育）に取り入れる必要があるかもしれない。そこで、その内容がどんなものであるか、測定や記述の方法にはどのようなものがあるかについて、まずはレビューをして、今後の研究のための基礎資料としよう、というのがこの報告書の趣旨です。報告書によると、次のような背景があります。

“OECD（経済協力開発機構）は、2015 年に「Skills for Social Progress: The Power of Social and Emotional Skills」というレポートを刊行しました。このレポートでは、社会の発展や個人の well-being につながるような、我々人間が持つさまざまなスキルを、認知的スキルと非認知的スキルに大きく整理して捉えており、後者を「社会情緒的スキル（Social and Emotional Skills）」と呼んでいます。

認知的スキルは、知識、思考、経験を獲得する能力であり、獲得された知識に基づく解釈や推論などが含まれます。一方、社会情緒的スキルは、「長期的目標の達成」、「他者との協働」、「感情を管理する能力」の 3 つの側面に関する思考、感情、行動のパターンであり、学習を通して発達し、個人の人生ひいては社会経済にも影響を与えるものとして想定されています。

青少年を対象とした 9 つの国での調査結果によると、認知的スキルは高等教育への進学や雇用、収入などでの成功を予測していますが、非認知的スキルの状態は後の認知的スキルの状態を予測するという分析がなされています。また、ある時点でのスキルが将来のスキルの状態を予測するというパターンが示され、早い段階でスキルを高めるよう

な教育の重要性が強調されています。認知能力に対する教育に加えて、これまで過小評価されがちであった非認知能力の発達やその教育にも注目していくことの必要性が論じられています。“

非認知的能力と言われるものの内容は、抽象的かつ難解で、私が解説しきれるものではありません。例えてみると、学力以外の個人の能力や性質、やる気、持続力、好奇心などが、学習に向かう力になり、学力の向上にも結びつく、ということでしょうか。近年の学校教育での「アクティブラーニング」も、これに関連しているようです。昔から朝礼での校長先生の訓示などで「よく遊び、よく学べ」と言われてきました。遊びを非認知能力の向上に資するものと解釈すると、どの程度遊べばどの程度の学力に結びつくのかが具体的にわかってきた、ということでしょう。

### 幼児教育・保育の要領・指針で見る「非認知的能力」

非認知的能力の測定はむずかしいけれども、それが重要であることは経験的にわかっていましたし、幼児教育・保育の場では、その育成がかねてより重視されてきました。2017年、幼稚園教育要領（文部科学省）、保育所保育指針（厚生労働省）、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（内閣府・文部科学省・厚生労働省）がともに改定され、2018年4月から適用されました。これらを一読すると、生涯にわたる人格形成の基礎を培う幼児教育のねらいの中心が、用語こそ使われていませんが、非認知的能力の育成であると理解できます。

要領・指針では、ねらいが総合的に達成された結果として、小学校就学時の具体的な姿（「10の姿」と称される）が示され、保育所保育指針<sup>2)</sup>では次のようになっています。

#### 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

- ア 健康な心と体
- イ 自立心
- ウ 協同性
- エ 道徳性・規範意識の芽生え
- オ 社会生活との関わり
- カ 思考力の芽生え
- キ 自然との関わり・生命尊重
- ク 数量・図形、文字等への関心・感覚
- ケ 言葉による伝え合い
- コ 豊かな感性と表現

「10の姿」の一つ「キ 自然との関わり・生命尊重」の内容は、次のように解説されています<sup>3)</sup>。

“子どもは、保育所内外の身近な自然の美しさや不思議さに触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、関心をもつようになる。卒園を迎える年度の後半には、好奇心や探究心をもって考えたことをその子どもなりの言葉などで素直に表現しながら、身近な事象への関心を高めていく。子どもが身近な自然や偶然出会った自然の変化を遊びに取り入れたり、皆で集まった時に保育士等がそれらについて話題として取り上げ、継続して関心をもって見たりすることなどを通して、新たな気づきが生まれ、

更に関心が高まり、次第に自然への愛情や畏敬の念をもつようになっていく。この頃の子どもは、身近な自然事象などに一層好奇心や探究心をもって関わり、気付いたことや考えたことを言葉などで表現しながら、更なる関心をもって自然に触れて遊ぶようになる。

最後の一文の「遊ぶ」を「勉強する」や「研究する」に置き換えて読めば、非認知的能力が認知的能力、あるいは学力へつながることの、わかりやすい解説になります。

## 学校より幼稚園・保育所・こども園と相性がよい、ひとはく

「美しさや不思議さに触れて感動する体験」は、好奇心や探究心といった子どもたちの非認知的能力を開花させるトリガーとなります。しかし、幼稚園や保育所で感動するような体験を用意し続けるには、苦勞が伴います。

幸いにも、美しいものや不思議なものをたくさん持っていて、身近な自然の扱いに精通した専門家がいます。それは、博物館です。博物館の保有する資料や人材が幼稚園・保育所の現場で活躍することは、幼児たちのさまざまな能力を育成するにあたって、大きな援護射撃となります。ひとはくは、これまでも多種多様な相手と連携して事業を行なってきましたが、とりわけ幼稚園・保育所との親和性が高いのは、このような双方の特性による当然の帰結でした。

開館 25 周年となった 2017 年度にひとはくは、「25」にちなんで、移動博物館車「ゆめはく」を活用したキャラバン事業を増強し、幼稚園等 25 箇所、小学校 25 箇所、合わせて 50 箇所を訪問しようと計画しました。訪問先の募集にあたって、同じ時期に、兵庫県内の幼稚園・保育所・認定こども園合わせて約 1,300 園、小学校約 600 校、中学校約 260 校へ、案内チラシ（写真 1）を送付しました。その結果、幼稚園等から 90 園、小学校から 5 校の申し込みがあり、中学校からの申し込みはありませんでした。ただし、



写真1 Kidsキャラバン（左）とSchoolキャラバン（右）の2017年度募集チラシ

Kidsキャラバンのチラシは兵庫県内の幼稚園・保育所・認定こども園の計約1,300園へ、Schoolキャラバンのチラシは、同じく小学校約600校、中学校約260校へ、直接送付した。

学校宛のチラシは他の出版物と同梱されていたため、発見されなかった可能性があります。指導内容や授業の進行による制約の大きい学校に対し、遊びを主体とする幼稚園等では、ひとはくからやってきた標本資料やスタッフが、美しさや不思議さに感動する素材やそれを助ける人材として、活用されやすいでしょう。

### 知識偏重から脱却したひとはく

大学の研究所を併設し、鳴り物入りで開館したひとはくは、当初、知識の提供を重視していました。普及教育機能の事業説明には、学校教育の補完、理科教育の再検討、知識の普及、などのキーワードが並び、「大学院程度の内容の講義を行い、県民の高度な知識要求に応える」ための「特別集中セミナー」なども実施していました。しかし、知識偏重ともいえるスタイルは、あるときを境に大きく変化します。

開館から10年に満たない2000年、「行政課題解決に向けた実践的研究活動、生涯学習社会に即した県民に魅力ある博物館活動を行う、活力ある博物館への転換」を図るため、事業や組織に関する改革「人と自然の博物館の新展開」に着手しました。一言で言えば、提供者の視点から、利用者主体の視点への転換でした。それ以後、ひとはくの提供サービスの内容は、展示、普及教育、シンクタンクなど、あらゆる場面で少しずつ変化してきました。

先に述べたキャラバン事業も生まれ、基幹となる常設展示も徐々に変化を遂げました。ひとはくでは開館以来、大規模な展示リニューアルをしていますが、収蔵資料の充実に伴ってコーナーごとに小さな更新を重ねてきました。次第に説明パネルや映像は少なくなり、実物資料が少しずつ主役の座を取り戻していきました。実物資料自体に対象年齢はありませんから、観覧者は、成長段階や興味関心に応じて、自由な解釈で鑑賞できます（写真2）。こうして利用者のニーズに真摯に対応してきたことが、利用者層の幅を広げることにつながりました。

近年のひとはくでは、小さな子どもの手を引いた家族連れが「今日は楽しかったね」と会話しながら笑顔で館を後にする姿を、多く目にするようになりました。四半世紀を経て、必要な人にはじゅうぶんな知識を、はじめての人にもたくさんの思い出を、持ち帰ってもらえる魅力的な博物館へ成長したのではないかと思います。

### 子どもから大人まで、博物館で、遊んでください

非認知的能力の発達の重要性は、幼児期に限りません。「美しさや不思議さに触れて感動する体験」は、青少年であっても大人であっても、学びの促進に大きな役割を果たします。それは、先に述べた保育所保育指針解説の文章中の子どもを児童や学生に、保育所を学校や家庭に、保育士を研究員に置き換えても、じゅうぶん通用することからもわかります。



写真2 カブトムシの拡大模型（2017年9月、丹波篠山市のキャラバン会場）

開館当初はなかった昆虫大型模型は、2020年現在8体あり、記念撮影スポットとして人気となっている。幼稚園・保育所へのキャラバンでも活用されている。

私は、昆虫をテーマとしたセミナーやイベントを各地で実施してきました。その一つとして、中学生だけを対象としたセミナーを2001年から続けています（写真3）。初めの頃に試みた昆虫学の講義は、まったく相手にされませんでした。彼らが求めているものは明らかに、専門的な知識ではなく、自由に活動のできる場と、自在にコミュニケーションの取れる仲間でした。この傾向は、家族対象でも、大人対象でも、同じです。

博物館の特徴は、実物（展示・収蔵資料、そして研究員）に触れ、だけれども、いつでも、いつまでも、自由な方法で学べる、という学びの

スタイルを、どこまでできるかは別として、提供できることです。このような主体的で自由な学びのスタイル、例えば、ぶらっと展示を見るとき、公園を散歩するとき、山へ虫とりに行くとかの行為は、多くの場合「遊び」と称されています。だとすれば、博物館はまぎれもなく「遊び場」、しかも内容にこだわった遊び場ということになります。

これまでは、博物館を「遊び場」と公言することに、とくに博物館内部では、抵抗を感じる人が少なくありませんでした。それは、教室に生徒を集めて先生が講義するという学校教育の伝統的な学びへの信奉や、「遊んでないで勉強なさい」という親の小言に象徴されるように、遊びと学びを区別してとらえる考え方から抜け出せていなかったからだと思います。「遊び」を「非認知的能力の育成」に言い換え、「学び」と同等に評価できれば、博物館は専門的知識の伝授のみならず、非認知的能力の獲得や開花にも大いに貢献している、と安心して発信できるにちがいありません。

みなさん、これからも博物館へ遊びにきてください。ひとはくの準備は整っています。



写真3 夜通し虫とりをし続け、翌朝、眠りに落ちた中学生（2020年7月、淡路市）

中学生限定のひとはく主催セミナー「ユース昆虫研究室」にて。集合・解散以外のスケジュールは特になく、自由に虫とりをする場として、2001年から開催している。

## 参考文献

- 1) 遠藤利彦（2017）非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書。国立教育政策研究所，281p.
- 2) 厚生労働省（2017）保育所保育指針。厚生労働省告示第百十七号。  
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf>
- 3) 厚生労働省（2018）保育所保育指針解説。374p.  
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf>